

「中年の危機」

一昨年に亡くなった元文
化庁長官で心理療法家の河
合隼雄さんのCD講和集「こ
ころの扉」をiPodに入
れて、毎週の東京―清水間
の車の移動の際に聞してい
る。その講和集の中に「充
実した中年期のために」と
いうテーマがあり、「中年の
危機」について述べた箇所
がある。心理学では、中年
という分野を重要視しはじ
めたのはユングからだと言
う。



故 河合隼雄氏

た宗教への素朴な信頼に支えられて、中年の「心の危機」というものがあまり問題にならなかつた。しかし生活が豊かになり、また長寿社会になるに従い、皆自分の生きる意味を、そしてまた必ず訪れる死へのこのころの備えが欲しくなる。こうした事は普段の日常生活や仕事の中ではあまり意識化される事は無い。しかし、何故か中年では「とんでもない事」が起こり、そして日々の生き方や無意識の価値観がおおきく揺さぶられる。「あなたにとつて本当に大事なものは何ですか？今のままでいいんですか？何か見失っているものはありませんか？」と…。

人間社会に宗教が存在するのは、人間が生と死を併せ持つ矛盾した存在であり、そして人間が自意識を持つ以上、その矛盾に何らかの回答を得ずして生きて行かないからだと思う。自意識と自己のアイデンティティを確立するための青年期の苦闘を経て、死して尚且つ生を得られるような何物かを得たい、と中天を過ぎつ

清野吉光氏のコラム

団塊 耕志 録 第10回



清野 吉光(きよの よしみつ)略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年 中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年株式会社サイト創立、現取締役会長。2007年タクシアリスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

異人たちとの夏

つある中年は渴望せざるを得ないので無いか。現代科学に生きる人間は、それを素朴に神に求められる、ある意味幸せな時代を失ってしまった。ひとりひとりが自分の神的なもの(X)を求めて彷徨せざるを得ない。

「異人」が支えてくれる

先の河合隼雄さんの話の中に山田太一の「異人たちとの夏」(一九八八年)という小説の話が出てくる。山田太一は「岸辺のアルバム」(一九七七年)や「ぶぞろいの林檎たち」(一九八八年)を書いた有名な脚本家で、この小説で「山本周五郎賞」をとった。恥ずかしい事に私はこの本の事を何も知らず、早速アマゾンでこの本を取り寄せ、また大林宣彦監督の手で映画化されたDVDを借りてきた。

この物語では中年の脚本家(風間杜夫)が妻と離婚し、また一人息子とも親子関係を作れぬまま、現代の洗練されてはいても上っ面だけの人間関係を営む中で、自分が十二歳の時に死んだ筈の両

親と出会い、交流する中で、自分の生きる意味を実感する事が語られる。



小説「異人たちとの夏」

とりわけ、片岡鶴太郎、秋吉久美子が扮する年若い両親が、自分の息子が異人(死者)たる自分達と交流することによって衰弱していくことを知り、自ら消え去ろうとするときに語る言葉、「お前は頑張ってるよ、誇りにしているよ」と素朴に、無条件に認めてくれるとき、自分を支えてくれるものの姿を感じる事ができる。そして、自分の心無い言葉と、態度に傷つき、自殺した名取裕子扮する隣人の若き女性が、異人として、半分は復讐半分は愛情で主人公に接近し、衰弱をさせるが、友に助けられる。しかし、主人公はその女性にも人間の関係の大事さ、かけがえの無さを教えてくれたことに心から「ありがとう」と感謝をする。

思うに異人は確かにこの世

には通常では存在しないが、しかしその想いは我々の中に存在しており、だとすれば我々もまた人々の心の中に想いとして存続出来る筈だ。だから、今現在の人間関係は今だけでなく未来に、もっと言えば来世に引き継がれるものだ。これは宗教的な話かも知れないが、宗教の話では無い。残念ながら多くの人間にとって、素朴な神や御先祖様への信仰は失われている。私もそうだ。しかし人間の関係を深く思い返すとき、この「異人たちの夏」の世界が単なる幻想、ファンタジーと言いつても構わない。少なくともこうした感覚が中年の危機を乗り越えずとも共存し、受け止めていくキッカケのような気がする。

Xを求めて

神を失った現代人は、しかし人間が必ず死ぬという問題への回答を持っていない。また人間は自分の事を第一に考える存在だが、しかしまた自分を超えた何物(X)かに繋がりたいと思う存在でもある。そうした矛盾が一方では人間を成長さ

せ、限りなく偉大な精神を作り出すが、一方でまたオウム心理教のような多くの悲劇をもたらす。この矛盾に目をつぶって生きることが一番簡単そうな気がするが、しかしその矛盾が解消してしまふ訳ではなく、かならず精神的な危機として表れ、自分にも他人にも迷惑をかける結果になり、社会の質も落ちてしまう。ひとりひとりがこのXを求め、ある意味では創造し、こころ穏やかにこの世を全うできるようなれたらと思う。

Xとは多分、絶対的な神ではなく、人間の関係性の中に宿っていると思う。それが観念的で抽象的であっても構わないし、また極めて具体的なもの、個別的であっても構わない。またそれは正邪、真偽の範疇ではなく、信じられるか信じられないかの世界だ。あなたはその「関係」の為に死ぬますか？あるいは必ずいつか来る死をその「関係」がある事によって安らかに迎えられるますか。

経営と理念

突然話も口調も変わりますが、経営にもこうしたXがあります。何故ならXの問題を抱える人間の集まりが企業を作り、そして仕事をを行い、生活の糧を得ている訳ですから。

現代において最も人間の問題が凝縮するのが企業と家庭だと思えます。家庭の事はさておき、企業ではとりあえず、商品、サービスを生産、販売し、対価を得、働く人に報酬を払い、利益をあげ、企業の存続、発展を目指します。しかし、人間による共同の営みである以上、こうした人間の精神や関係に関わる問題が企業でも大きく問われてきます。

オリジンでも二十周年の時に立てた「未来への志」の中で、社員の人に「目に見える報酬」のみならず「目に見えない報酬」を与えられる会社に成りたいと述べています。「目に見えない報酬」とは仕事の中で人が能力的に成長し、また人間の関係が豊かなものになり、さらに仕事の中で、やりがい、生きがいを得られるようにし

たいという事です。其の為に会社自体がお客様(社会)に役に立ち、感謝されるようになるという事が必須です。其の為には我々自身が「お客様の深いニーズに応える自己革新的技術者集団になる」事、そしてこれを会社の経営理念としていきます。

が、経営が個人のXを提供しようという訳ではありません。経営自身がそのXなくして経営判断ができない局面があるという事です。経営ってそういうレベルのものですよね、きつと...

舞台「異人たちの夏」
ところで今、東京・日比谷のシアタークリエで舞台「異人たちの夏」が鈴木勝秀脚本・演出、椎名括平、内田有紀主演で上演されているらしい...。
(二〇〇九・七・二〇記)



舞台のパンフレット

ALCmini II

Alcohol Recording System for Professional



「吹き込む」・「測定する」・「記録する」。
ALC-mini-IIで始めるカシタン3ステップの飲酒点検。

製品貸し出し
キャンペーン

好評発売中!!

コンパクトボディでプリンタ機能搭載!
3ステップの簡便性と高い測定精度を実現!!
スピーディに高精度の飲酒点検が行え、
信頼性の高いアルコール測定記録を残すことができます。

＜お申し込み・お問い合わせ＞

株式会社システムオリジン

TEL: 03-3834-8352

関東支店営業本部

〒101-0021 東京都千代田区外神田5-3-4-7F

拠点/北海道・東北・関東・甲信越・東海

名古屋・関西・中国・九州

＜製造元＞

東海電子株式会社

<http://www.tokai-denshi.co.jp>